日本語卒論・修論提出の体裁について

2006年12月1日　地理学教室発行

ワープロ使用の場合は，別紙のようにＡ４版に，１頁（枚）につき８００字前後になるように印刷する。字数は，文末に記入すること。マージンは上下 30mm，左右 30m，本文の活字 12ポイントを使用。注，参考文献も同様の書式。頁数は下の余白にうつ。この文章のフォーマットはほぼ８００字に収まるようになっているので，このフォーマットを利用してよい。

手書きの場合は，所定の原稿用紙を使用のこと。この場合の注は脚注である。以前の手書きの卒論を参考のこと。

提出時には，ファイルに綴じて提出，要領は事務室で確認のこと。図表なども，Ａ４版で提出のこと。ただし大きい場合には折込みも可能。

ページ番号は，目次，本文，注，参考文献のみに中央下に通し番号で表示する。図，表などにはページ番号はふらないこと。

順序は，目次，本文（図・表は，引用個所近くに挿入），注，参考文献である。

分量については，本文，注，参考文献（図・表は除く）で，卒論は 20,000 字，修論は 40,000 字が目安である。この枚数に欠ける場合には，成績評価に影響することがある

目次については，何年度提出卒業論文，タイトル，名前（学籍番号），章立て，そしてキーワードを５個必ずつけること。

注，参考文献，体裁については雑誌「地理科学」方式である。以下に添付のサンプルと，参考資料１を参照のこと

章立ては，章：Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ…，節：１），２），３）…，項：（ａ），（ｂ）（ｃ）…とする。

Ⅰ はじめに

本稿では,明治維新以降の日本の近代化がなぜ成功したのか,なぜ対アジア諸国に対しての比較優位を早期に達し得たのかについて考えてみたい[1)]。そしてその解答として,日本政府が採用した開発政策が的確であったこと,そしてその開発政策の目的が,国土という空間の統合にあり,そのことが近代化を極めて迅速に進行させたことを指摘したい（阿部,1998）。アカデミックな貢献としては,日本の地理学と歴史学，政治学 3 つの分野において,日本の近代化の空間的メカニズムに関して新たな知見を提起するものである[2)]。

大沢(1992)が言うように地理学的には,空間の統合という概念が,日本近代の開発政策を唱導するイデオロギーのベースにあったことを指摘したい。すなわち明治期の近代化の過程において，いくつかの開発政策が実行されたが，その政策のイデオロギーを検討すると,次のような地理的言説が非常に大きな意味をもっていることが見て取れる。すなわち「一定の範域内に資本をどのように効率的にバランス良く投下してゆくか」という地理的言説である。その含意は一定の空間内でフローを効率的にネットワーク化すること、加えてある水準のサービスがどの空間においても同じ程度に享受できるという空間を均質化することから成り立っている。ルフェーブル（1994）のいうように、空間は「具体的抽象としては、ネットワークと通路、関係の束ないし房によって「実」在を獲得する」。従って空間の統合とは，より高速・大量の運輸・通信手段の建造により、2 地点間を空間的に移動するための時間的障害を除去する空間的社会過程である。

したがって，われわれの分析課題は，以下のように設定することができる。たとえば加納（1998）が述べるように，今

表１　あれやこれやの表（表の場合タイトルは上）

出典：○○○

図３　これはなんやの図（図の場合タイトルは下）

出典：○○○

写真４　こんな写真（写真の場合タイトルは下）

撮影日時・撮影者：

この空間の統合という観点からすると，日本の近代化は，鉄道政策，港湾政策，道路政策が国家の事業として・・・・・・

注

1) しかし，阿部が無理があるとした1つの都市を対象とした「都市システム」という用法は，地理学以外の研究分野での用法を考慮に入れたものであると考えることができる。本稿ではこうした点を配慮に入れて「都市群システム」という用語を主として使用している。
2) 山本正三・奥野隆史・石井英也・手塚章編(1997)，p.188による。
3) これに対しては，都市群システムという対象の再定義ではなく，水野が「数理モデルの構築」という目的を持っているからであるということは正当に評価しておかねばならない。また，自己組織化論が焦点を当てているのは，システムの動きではなくシステムが生み出す構造の変化が主である，という点も考慮しておく必要があると思われる。
4) 本文中の引用は，特に断わりがない場合には，ルーマン(1995)からの引用である。なお頁数は，邦訳での掲載頁数である。
5) ここで用いられている「環境」とは，簡潔に言えば「分析対象となっているシステムごとに，そのシステムからみてそれとは別のもの(上，p.ii)」であり，それはシステムにとって位相的外部として存在するものである。
6) 村中知子(1996)の説明による。ここで用いられている

参考文献

阿部和俊(1998):「都市システムと都市群システム」，経済地理学年報 44-2，p.66～69 頁，

大澤真幸(1992):『行為の代数学』，青土社。

河本英夫(1995):『オートポイエーシス』，青土社。

水津一朗(1987):『景観の深層』，地人書房。

スペンサー＝ブラウン，G．／山口昌哉監修，大澤真幸・宮台真司訳(1987):『形式の法則』，朝日出版社，xxiv＋171 頁（Spencer=Brown, George.(1969): *Laws of Form*, George Allen and Unwin Ltd.）

中西真知子(1998):「再帰性と近代社会―ギデンズの再帰性概念の徹底化を論じる―」，ソシオロジ 43-1，21～36 頁。

ルーマン，N．／佐藤勉監訳(1993･1995):『社会システム理論（上・下）』，恒星社厚生閣，970 頁（Luhmann, Niklas.(1984): *Soziale Systeme* , Suhrkamp Verlag.）

水野勲(1995)：「自己組織化論による都市群システムのモデルとその応用―システム概念の再定義―」，人文地理 47-2，43～61 頁。

村中知子(1996)：『ルーマン理論の可能性』，恒星社厚生閣。

森川洋(1990)：『都市化と都市システム』，大明堂。

山本正三・奥野隆史・石井英也・手塚章編(1997)：『人文地理学辞典』，朝倉書店。